

## 日米の日記・記録から

日本、アメリカ双方の開国交渉期の動静を、当時の資料による年表でたどります。

この年表は、

右列（破線まで）は、『本牧表日記』から

中列（太線まで）は、他の日本側資料から  
左列は、外国側資料の『ペリー日本遠征隨行記』から  
の順番に作成されています。本文の右側の□で囲んだ略号は、左の文献名に対応しています。

記載順は、和暦（西暦）・曜日・天候、事項・使用文献の略号。

曜日は『ペリー日本遠征隨行記』からです。

天候は『隨聞積草』を主に、『関口日記』からは（ ）内。

時刻は日本側資料に現在の時刻を（ ）で補記しましたが、季節で  
違いもあり、目安となるものです。

使用文献と略号（＝以下）は次の通りです。

**本牧表日記—鳥取藩海防**②—本牧、横浜郷土研究会編、  
横浜市図書館刊、昭和六〇

**大日本古文書 幕末外国関係文書之三～五**③～⑤、

東京帝国大学編・刊、明治四四～大正三

**鳥取池田家文書**①（日本史籍協会叢書一四九）—池田①、

日本史籍協会編、東京大学出版会刊、昭和四三、

（覆刻）

**関口日記 第十三卷**—関口⑬、横浜市文化財研究調査会編、

横浜市教育委員会刊、昭和五四

**隨聞積草**（金駅日記）『神奈川県郷土資料集成第二輯』所収、

神奈川県図書館協会編・刊、昭和三三

ペリー日本遠征隨行記（新異国叢書8）||隨行

サミュエル・ウイリアムズ著、洞富雄訳、

雄松堂書店刊、昭和四五

横浜歴史年表||横年 横浜市役所編・刊、昭和二六

近代日本総合年表 第二版||近年 岩波書店編・刊、昭和五九

使用文献のうち、

『本牧表日記』は、鳥取藩が横浜本牧（現、横浜市中区内）に海岸防備のために來ていた際、書かれたもので、記載期間は嘉永七年（一八五四）正月一六日から同年三月二二日までです。

『関口日記』は武州生麦村（現、横浜市鶴見区生麦）の名主・関口家が代々、書きついできた日記です。

『隨聞積草』は日記体の記録で、記録者は不明ですが、神奈川宿の役人ではないかといわれ、記載期間は嘉永七年正月二三日から同年三月二三日までです。

『ペリー日本遠征隨行記』は、ペリー艦隊で主席通訳を務めたS・W・ウイリアムズの日記です。

なお、この年表は、『本牧表日記』に付載された「関係年表」から抜粋していますが、時刻・人名など補記したところがあります。

嘉永六年（一八五三）

一一・一四（一一・一四）（陰天）

外国③、池田①

江戸内湾警衛の場所変更の達しがあった。

細川越中守斉護は浦賀大津へ、その後の本牧に鳥取城主  
松平（池田）相模守慶徳が交替した。「老中」→「諸大名」

嘉永七年(一八五四)

一・一六(二・一三)月曜日 快晴(陰天)

本牧

岡部善右衛門ら一番手の者たち、朝五つ時(九時頃)江戸出発、暮六つ時(五時半頃)本牧到着。夕刻、江戸にて老中松平和泉守乗全より呼出し指図受ける。

外国④

松平相模守(鳥取城主)一番手の人数が本牧表に出張、と目付から町奉行へ通達。

未中刻(午後一時半頃)、異国船六艘が浦賀の方から乗り込み、武州金沢乙艤浜より一里半ほどの沖合に追々、碇をおろした、と米倉家(武州金沢領主)家来より老中に届け。

随行

六艘からなる艦隊は、正午には浦賀の町の沖に達した。提督は「アメリカ碇泊所」「小柴沖」まで全艦を進めて投錨させた。サザンプトン号は三日前に到着。

一・一九(一一・一六)木曜日 夕より雨北風(微晴)

本牧

猿島台場と本牧八王子台場との中ほど小柴村沖に異船將官の乗る大船と蒸氣船三艘、計七艘があり、劍つき鉄砲をかつき船端で足並みを調練の様子、遠眼鏡でこちらを見ている異人三人、船鍛冶をバッティラに乗せ、伝馬船に大砲を据えつけているのもあり、江戸内海に乘込む様子。

関口⑬

本家(生麦村関口与次右衛門家)の者と異国船見物に行き、横須賀で三人上陸して浦賀まで行つたが、我等は船で直に帰つた。

随行

二時ごろ、堀達之助ら一行がやつてきた。リーダー格の役人は快活で、凶々しい男だった。四時すぎまで艦内を遊歩したり、士官室を訪れ、エンジンの見学の際には多くの質問が出た。

今日は測量隊が出ているが、目下のところ、測量を強行して日本側の出方を打診中。

一一二〇月曜日 快晴東風(晴天)

本牧

四つ時(十時半)頃、富岡沖に滯船の異船からバツテイラに十三人ばかり乗り、本牧八王子山台場下に漕ぎ寄せ、測量をした様子のうえ、同所山下腰に白く塗り、文字のようなものを書き、それまでアメリカ国旗を立て、塗り終つてから白い合い印を立てた。その合図であろうか富岡沖の滯船から大砲五発を打つた。四つ半(十一時)過ぎ、バツテイラは元船へ帰り、直ちに根岸沖へ行き測量をしている。夜、白土を落とそうとしたが落ちないので泥を塗つて置いた。

外国④

巳刻(十一時前後)頃、バツテイラで十三、四人程が本牧八王子台場下に乗りつけ、崖下を量り、目印と思われるが、白土(ベンキ)を塗り、そのまま碇をおろした、と松平相模守が老中へ届け。

随行

測量隊のボートは、先週の土曜日も今日も、海岸の住民や小船の人たちと、かなり友好的な接触を保つた。

一一八(一一五)土曜日 快晴北風(微晴)

本牧

昨日の異船五艘、本牧沖を乗り越し生麦沖へ滞船、あと二艘のうち一艘、本牧沖に見えたが、これも乗り越した。

関口⑬

軍船一艘乗り入れ、都合六艘が生麦浦沖へ滞船した。

横年

香山栄左衛門がアダムス(参謀長)と交渉し、会見地を横浜村に決めた。

随行

ビュカナン艦長・アダムス参謀長らは香山栄左衛門の先導で、会見所候補地の下検分のため、横浜に上陸した。

一一・四(三・一)木曜日 薄曇南風快晴(微晴)

本牧

明後六日、いよいよ横浜にて応接と決定の達し。

夕方、アダムス参謀長と応接場建物の進捗状況などを調査に、横浜へ上陸。建物は五棟で、材料は浦賀で使つたものを使つた。多くの村人がわれわれを見物に来ていた。

随行

一一〇(三・八)水曜日

快晴曇後北風(晴天)

本牧

朝四つ半時頃(十一時頃)、異船横浜村へ上陸、未の中刻(二時過ぎ)終る。本牧警備隊から注進のため番船に士分四人乗り出船、十二天山に岡部善右衛門が詰め、未の下刻(二時頃)応接が済んでからいざれも引取る。

関口⑯

今日、浦賀御奉行ほか御役人様方が、横浜で異国人と御応待あるとのこと。その祝いとして、鉄砲数十挺が海陸両方で打たれた。

随行

提督はマセドニアン号の礼砲の中を正午に艦を離れ、横浜に上陸、会見。応接掛全員を晩餐に招待した。

一一一(三・九)木曜日

快晴南風(晴天)

本牧

異人埋葬あり、本牧警備隊の夫卒、よほど見物に出る(翌十二日、この見物の件につき、持場でもないのに不都合であり、横浜村警備の真田家の者が制したのに聞き入れず、明日また異人上陸に見物がましいことがあつたら召捕る、と伊沢美作守政義からきつく申し渡される)。

外国⑤

昼九つ時(十二時)頃、異人の葬式があり、よほど上官の異人の由で、異人がおよそ二、三十人見送りのため乗り組んだ。

随行

ミシシッピー号艦上で死んだ海兵隊員ウイリアムズの埋葬が、横浜増徳院の山際で行なわれた。

一一・一五(二・一三)月曜日 朝曇五つ半時(九時

半)頃より雨夕方より大南風(雨天)

本牧

異船より献貢物を横浜へ揚陸につき上陸、多人数でもないので警備は少々にとどめる。ただし見届けかたがた密偵を番船で派遣した。

随行

朝十一時までに、將軍・老中などへの贈呈品を海岸へ陸揚げし、アボット艦長から応接掛に贈呈された。

一一一七(三・一五)水曜日

曇(陰天)

本牧

伊沢美作守より、明日異人上陸につき警備方について達し。なお同人に、持場幕張の内へ異人が入り込み、制止を聞かなかつた場合、からめ捕る心得でいるが、なるべく当方の持場には上陸をきびしく断つてほしく、それがむずかしければ、浦賀奉行配下の者を派遣してほしい、そうでもなければ警備のかいがないと伝えたところ、応接中はとかく穩便にとりはからい、からめ捕るようなことはしないようとに回答があつた。人数書を幕府に届ける。

閑口⑬

大黒屋紋次郎(神奈川宿)が来たが、明日、横浜で異国人と応接があるとのこと。

隨行

われわれは蒸気機関車の調整やら、レールの敷設などで忙殺された。贈呈品目録の翻訳が私の仕事だつた。贈呈品の一部は今日運ばれた。

一一一九(三・一七)金曜日

雲凪申刻(三時前後)頃より夜五つ半時(八

時半)頃みぞれ降又雪降(陰天、夜中雪少々降)

本牧

横浜応接場へ異人上陸。幕府より借用の筒、五百目玉張筒五挺、三百目玉張筒十挺が本牧に到着。

横年

ペリーは士官・通訳以下二百人をしたがえて、応接場で第二回目の会見。

関口⑬

満作たちは、横浜行きを昨日延引し、今日行つたという。

隨行

提督は一時に艦を出発し上陸、会見に三時間半ほど費やした。

電信機の電線は、一マイルの敷設が終つた。種類の多い農機具は大変な注目を集めている。

一一・一一(一一・一一)火曜日

快晴大南風(陰天、南風強シ)

近年

横浜応接所で、ペリーの献上品汽車模型を円型レールで試運転。

隨行

蒸氣機関車と炭水車が線路の上を走り、見物人を大いに喜ばせた。

一一一六(三・一四)金曜日

曇夕刻より小雨(晴天)

本牧

横浜において異人応接。蒸氣船一艘、辰の上刻(八時半頃)本牧沖を通過、アメリカ本国へ帰航。

隨行

早朝、サスケハナ号が香港に向けて出航した。正午ごろ、提督上陸。江戸から来た九十余人の相撲取りが力技を見せ、ペリー提督が試しに一番大きな力士(大関小柳常吉)の太鼓腹を殴つた。

一一一九(三・一七)月曜日 快晴大北風(晴天)

本牧

九つ時(十二時)過ぎ、蒸氣船見学に役人乗り込みの節、空砲を打つ。

隨行

ボウハタン号で招宴。六十人分のテーブルが甲板に用意され、日本人は全部で二百人ぐらいだった。応接掛四人のために、それぞれの陣羽織を描いた小旗が立つた、四個の大型ケーキを出した。五時半ごろ、宴会から余興に移つた。

三・二(三・三一)金曜日　雲朝はらはらと折々

雨　昼より晴南風(晴天、南風吹)

本牧

横浜において異人応接。

外国⑤

日米和親条約調印。午刻(一時)過ぎ上陸して応接、申刻過ぎ(三時半過ぎ)に済み、本船に乗り戻つた。

隨行

提督は一時十五分ごろ艦を出発し会見、神奈川条約が調印された。

三・九(四・六)木曜日 (晴天)

随行

提督と一行が散歩に上陸、(横浜村)村長「名主石川徳右衛門」の屋敷を訪ねるなどした。

# 三・二一（四・一八）火曜日（陰天）

本牧

卯の刻頃（七時前後）、小柴沖の異船二艘、觀音崎へ退帆し、辰の中刻（八時半頃）頃、城ヶ嶋沖に帆影隱見。異国船退帆につき警備増人数引揚げの達し。

外国⑤

小柴沖に碇泊の七艘は、十四日より軍艦が追々、退帆し、残る蒸氣船二艘も今日卯中刻（七時頃）に退帆し、小柴沖を残らず退帆した、と応接掛から老中へ届け。

隨行

日の出前、二艘（ポウハタン、ミシシッピー）の蒸氣船が出航、三時頃下田港に到着した。